

# ブックガイド

No. 15 2015. 8. 29

## ■地震 津波

『日本の地震予知研究 130 年史 明治期から東日本大震災まで』

泊 次郎／著 東京大学出版会 2015. 5 453. 38/ト 155

原発事故で陰に隠れた形になりましたが、今回の東日本大震災では、地震の規模や津波の高さが過小評価され、避難の遅れにつながったともいわれています。地震予知研究や地震学研究的根幹をゆるがす事態でもあったわけですが、日本では古来より、大きな地震があるたびに地震予知への関心が高まり、それまでの研究がリセットされるという歴史が繰り返されているといえます。何らかの予兆をもとに地震を予知することには限界があることは確かです。しかし地震予知研究の歴史を辿ることで、我々が地震災害に備えて何をすべきかを教えてくれる本です。

## ■福島第一原発事故

『福島 10 の教訓 原発災害から人びとを守るために』

福島ブックレット刊行委員会／[編] 福島ブックレット刊行委員会 2015. 3 LS543. 4/F44/1

震災 4 年目の 3 月に仙台で開催された国連防災世界会議に併せてまとめられた、福島 の教訓を世界に伝える多言語ブックレット。英語・韓国語・中国語・フランス語の翻訳版が刊行されています。原子力や放射線のこと、原発災害など分かりやすく説明し、被害者の権利を守る様々な国際法や国際基準等を紹介しています。原発事故はどのようなものか、どのような対応や予防が可能か、知っておくべき 10 の教訓です。

## ■文学・体験記

『生きてやろうじゃないの! 79 歳・母と息子の震災日記』

武澤順子, 武澤忠／著 青志社 2012. 7 916/妙 127

震災 1 年後、相馬市で被災した老婦人に焦点をあてたドキュメンタリー番組が放映されました。その番組は、婦人の息子であるディレクター武澤忠氏の手によるもので、それを活字にしたのがこの本です。

実家を解体せざるを得なくなった福島 の被災者の悔しさ、悲しみが滲み出ます。「憂きことのないをこの上に積もれかし 限りある身の 力試さん」を家訓とする家族の物語であり、武澤忠氏の今後の活動にも期待したいと思わせる 1 冊です。

## ■農林水産業 動物

『福島のおコメは安全ですが、食べてくれなくて結構です。 三浦広志の愉快的闘い』

かたやま いずみ／著 かもがわ出版 2015. 3 LS612. 1/K4/1

代々南相馬市小高区で農業を営み、福島第一原発が立地している「浜通り農民連」の副会長を務める、「愉快的に闘う農民」三浦広志さん。彼は何を考えて闘っているのか。震災後、国や東電等を相手に交渉し、農業の活動を再開、地域の復興を着実に進めています。「安全だから食べて下さい。」ではなく、「あなたが食べてくれる気持ちになるまで、毎年毎年、安全なコメをつくり続け、測り続けます。」といえます。取材を通して、力強く前向きなその姿を伝えています。

■農林水産業 動物

『牛と土 福島、3.11 その後。』

眞並 恭介／著 集英社 2015.3 LS645.3/S1/1

原発事故によって、土とそこに生きるものの運命は変えられてしまいました。経済動物としての価値を奪われた牛もその一つ。その命に新たな価値を与えるべく活動する畜産農家や獣医師への取材から、やるせない現状と未来への希望があるがままに描写されています。汚れた大地に生き、死んでいく牛の姿から見出された、牛と土の間にある不可分の関係が、命の在り方、命の負う役割について力強く語りかけてきます。第37回講談社ノンフィクション賞受賞。

■復興 防災

『復興とは 3・11 その時そして』

朝日新聞盛岡総局／編 ツーワンライフ 2015.3 369.31/ア#153/

朝日新聞岩手版の連載記事をまとめた、被災地の奮闘録です。後方支援拠点となった岩手県遠野市での支援活動、被災地に本を届ける試み、鎮魂の郷土芸能奉納、思い出の写真を洗浄し届ける活動、あの日被災地で何が起こり、人々が復興に向けてどのように災害と向き合ってきたのかが伝わってきます。未だに復興中の被災地の記録は、心に響き、次の世代にも震災を伝えていかなければならないということを感じさせます。

『災害に学ぶ 文化資源の保全と再生』

木部 暢子／編 勉誠出版 2015.3 709.1/キ/153

災害で失われるものは目に見えるものだけではありません。そのひとつが「文化」です。地域伝統の行事や方言・文化財などが被災した際、どのように対応するか。災害そのものをどのように後世に伝えていくか。専門家たちが災害とどう関わり、何を学んだかのかをまとめたのが本書です。被災した文化財のレスキューからその後の活用、災害そのものの後世への伝え方などさまざまな提案がされており、文化を残す意義を問いかけています。

■こども向け

『原発事故に立ち向かった吉田昌郎と福島フィフティ』

門田隆将／著 PHP研究所 2015.3 543/カ

東京電力福島第一原発事故が起きたとき、その現場では、どのような人々が、どのような想いで事故に立ち向かったのでしょうか。本書は、当時の所長だった吉田昌郎さんと、現場に残り復旧に力を尽くした約50人（のちに海外メディアから“福島フィフティ”と呼ばれました）の事故発生から数日間の状況を伝えています。死を覚悟した極限状態の彼らを動かし続けたものを知ることで、本当に大切なものとは何か、を考えるきっかけになる一冊です。